

「心のきよい者」(要旨)

聖書箇所：マタイ 5:8

私たちは、様々な場面で「根っからの悪人はいない」、「…いい人なのに、魔がさしたのだろう」という言葉を耳にします。人の心は良いものだけど、外から起こる様々な出来事や汚れに触れることで汚れてしまう。こうした考えの根底には、人間の本性を善と見る人間観があらわれているようです。そうした人間観に基づいて、山上の説教を読むならば、「心のきよい者」とは、長年かけて心に付着した「罪」や「汚れ」がキレイに祓(はら)い落とされ、本来の無垢な心の状態に戻った人と言えそうです。さて、聖書は何と言っているのでしょうか。

【1】人を汚すもの

主イエスは、人間が生まれ持った「心」そのものが汚れているのだと言われました。「人から出て来るもの、それが人を汚すのです。内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出て来ます。淫らな行い、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさで、これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです。」(マコ 7:20~23)

人の内側に様々な悪が存在し、「それが人を汚す」のだと教えられたのでした。つまり無垢な心が少しずつ汚れていくのではなく、生まれた時から人の心には罪があると言うのです。

【2】心のきよい者とは

では、主イエスが語る「心のきよい者」とはどのような人なのでしょう。この「きよい」(καθαρ)とは、道徳的な清さ、汚れがない、そして無垢という意味を持ちます(ギリシャ語辞典 BDAG)。W.バークレーは、それを「混ざり物がなく、水で薄められていない」(W.バークレー)と説明しました。しかもそれは神の目から見て、ということです。人は、他人の心の中まで見ることはできません。仮に「心」の中では敵意を抱いたとしても、紳士的に振る舞うこともできるでしょう。人は、心の動機まで見抜くことができませんので、外側にあらわれる行動で評価します。当時の律法学者やパリサイ人は、誰の目から見ても模範的な人々でした。しかし主イエスは彼らの

心の状態を指摘されたのです。「…おまえたちは杯や皿の外側はきよめるが、内側は強欲と放縱で満ちている。」(マタイ 23:25)

神は、私たちの内側の性質と外側に表明したことの合致を求めるお方なのです(参照:イザ 29:13)。たとえ人が「きよい者」だと認めても、神の目には必ずしも「きよい者」だとは限らないのです。果たしてその神の目にさらされた時に、誰が「心のきよい者」だと言えるのでしょうか。

【3】心のきよい者

パウロの告白に耳を傾けましょう。彼は「心のきよい者」であらうと願いました。そうした彼は「私は、自分のうちに、すなわち、自分の肉のうちに善が住んでいないことを知っています。私には良いことをしたいという願いがあるのに、実行できないからです」(ロマ 7:18)と自分の胸の内を正直に告白しました。彼は自分のうちに巢食う罪の現実と向き合い、それに心を痛めました。聖書はそうした心にある罪の汚れを「緋色」に例えます。何度洗っても色褪せることのない「緋」のような罪のシミ。きよさを求めれば求める程、その「緋」は一層際立つのです。しかし神はそうした「緋」でさえ「雪のように白く…羊の毛のように」真っ白にしてくださいと言われたのです(イザ 1:18)。

それは私たちをきよめるために罪なきお方が十字架で死なれたからでした。「…御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」(1ヨハネ 1:7)。

「心のきよい者」とは、人の目に「きよく」映る人ではありません。あるいは「きよい者だ」と自負する者でもありません。「私は本当にみじめな人間です」(ロマ 7:24)と自分の罪を自覚し、それでもキリストの十字架の贖いが、罪で汚れきった私を洗いきよめるためであったと受け入れ信じる人です。主イエスの十字架の血潮によって、あなたは「きよい者」とされたのです！

